ISSN 0386-4790
第18号　国文学研究資料館報　昭和57年3月

国文学研究資料館報
第18号
昭和57年3月

中国における日本文学の翻訳と研究

葉渭渠
唐月梅

日本文学の翻訳と出版

中華人民共和国が成立してからは中日両国の文学交流も新しい発展をとげてきました。建国以後、三十年間で翻訳された日本作品はあわせて二百種類あまりにのぼり、これは解放前の三十年間にくらべ、種類、数量とも、おおよそ同じでありますが、テーマのうえでは、より系統的になっており、訳文の質からいっても、かなり大きな向上が見られ、研究活動も新たな歩みを見せております。しかし、一九五七年以後、文芸指導活動の面での「左より」の誤りから、また十年にわたる文革の動乱と「四人組」のおしすすめた閉鎖的排外主義と文化面での虚無主義などの影響から、日本文学を紹介することも含めて、大きな困難にぶつかりました。この十年間、ただ小林多喜二の『蟹工船』『不在地主』『沼尻村』の三種類だけを公開出版したにすぎず、『党生活者』でさえもさまたげを受け、出版することができませんでした。人民文学出版社は当時の可能な条件を利用して、「内部出版」の形で、有吉佐和子の『恍惚の人』、城山三郎の『官僚たちの夏』の出版を成功させました。しかし、佐多稲子の『樹影』は、アントニオニ「批判」によって挫折し、古典の名著『源氏物語』もまた、出版計画から抹消されてしまいました。研究活動はもちろん完全に停頓の状態におかれていました。

「四人組」粉砕以後の二、三年間、一部の研究者と編集者は、相変わらず受けたショックから醒めやらず、どのように正しい態度で日本文学をあつかうかについての認識もはっきりせず、観望、徘徊の二段階におかれていたのです。中国共産党の十一期三中総以後、全国的範囲で思想解放運動が広げられていったので、日本文学を翻訳する面でも、喜ばしい現象があらわれ、いくらか初歩的な成績をかち取るようになりました。

まず、思想解放運動がつっこんでくり広げられたことによって、いかに正しく日本をふくめた西側の現代文学を評価するかについて模索と研究がはじめられ、若干の成績をあげることができました。長期にわたって、「文芸は政治に奉仕する」というスローガンのもとで、日本文学、また他の外国文学に対してもそうですが、一面的にその政治的教育の役割を強調したため、その認識的価値と参考の役割をゆるがせにしてしまい、文芸の法則と役割にそむいていました。

創作方法では、リアリズムを除いて、ローマン主義はややおとり、その他の主義はすべて取るに足らず、モダニズムとなると畏れをなして近よらず、全面的に否定しました。こうした結果、日本文学研究の活動も前へ進めば進むほどせまくなり、話題にすることといえば、リアリズム、小林多喜二でした。はては、一時リアリズムでさえその存在を許さなかった頃もありました。

実際には文学は現実生活の反映であります。社会生活は万華鏡で、豊富多彩です。それを反映する面はもちろん違いがあって、直接的、間接的、表面的、実質的なものであって、千篇一律でありうるはずはありません。ましてや、社会制度も違い、人生の哲理も違うといった要素があるため、どうして完全無欠を求め、同じ尺度ではかることができるでしょうか。例えば、いくつかの現代派の作品にしても、現代人の複雑な意識、経験と感想を現わしており、それは

一目次一

中国における日本文学の翻訳と研究　葉渭渠・唐月梅……1
オーストラリアにおける日本文学研究の現状―ハーバー氏に聞く……4
第五回国際日本文学研究集会について……5
情報検索システムのテスト公開について　田嶋一夫……7
文庫紹介①麗沢大学図書館……9
文献資料部事業報告……福田秀一……10
研究情報部事業報告……小山弘志……11
整理閲覧部事業報告……本田康雄……12
共同研究・彙報……13
利用者へのお知らせ……15
昭和五十七年度春季学会開催一覧……16

かなり特異な方式で、現実生活のなかでのある特徴を反映し、そのうえ、芸術的には自らの創造と魅力をもっているために、それ自体の認識価値と参考の役割をもち、ある程度汲みとるにあたいするものを持っています。私たちはかならず実事求是の精神でこれらの作品に適切な評価をあたえなければなりませんし、全面的に肯定したり、あるいは全面的に否定したりすることはすべて妥当ではありません。

現在は、模索の過程で、みんなの認識はそれぞれ深い浅いの違いがありますが、以上述べた点では一致しています。また、この模索は始められたばかりで、日本の現代文学は多くの複雑な問題にかかわってくるため、今後さらにつっこんで研究する必要があると考えます。話はもとにもどりますが、思想解放運動のなかにおけるこうした模索は、タブーを打ち破り、「左より」の誤りを克服し、日本文学の翻訳、研究の健全な発展を促進するうえで、たいへん重要な役割をはたしました。

それによって、日本文学翻訳、出版の活動はさらに系統的、計画的におこなわれるようになりました。以前は、日本文学の翻訳、研究は大変不充分でありましたが、現在では、翻訳、研究の対象が拡大され、古代から現代まで、現実主義からモダニズムにいたる各流派まで含まれるようになりました。古典文学では『源氏物語』を全訳して、その上巻は今年の五月に出版されました。中巻と下巻はことしと来年に出版される予定です。『古事記』と『日本狂言選集』は新しい訳本で再出版しました。『伊勢物語』、『竹取物語』、『落窪物語』、『枕草子』、『徒然草』などはすでに翻訳しおわって、出版の手配を待っています。『平家物語』などはいま翻訳しているところです。現代のものでは、これまで出版したことのない川端康成の『雪国』『古都』、森鷗外の『舞姫』『雁』、武者小路実篤の『友情』『愛と死』、谷崎潤一郎の『細雪』なども、今では紹介され始めるようになりました。また、いくつかの出版社は四、五篇の日本現代文学短篇小説選を編集し、過去においてほとんど紹介されなかった作家、例えば丹羽文雄、梅崎春生、安部公房、椎名麟三、尾崎一雄、遠藤周作、曽野綾子などの作品をも組み入れました。日本文学の理論の翻訳、研究にも注意をはらうようになりました。西郷信綱の『日本文学史』、吉田精一の『日本現代文学史』を翻訳、出版したほか、今では松原新一などの『戦後日本文学史・年表』、坪内逍遙の『小説神髄』などの翻訳に力をそそいでいます。人民文学出版社はまた日本文学叢書（全三十巻）をだしつつあります（注1）。一カ国の文学叢書として出版されるのは日本がはじめてです。そのつぎは印度文学叢書を出版するつもりですが、その他の国はいまだに叢書出版の計画がありません。つまりこれから日本文学の翻訳、研究の活動をできる限り、より全面的に、より完全にしてゆくつもりであります。あげるに値することは、今年九月に専門的に日本文学の紹介をする初めての雑誌『日本文学』を創刊しました。これは翻訳や評論を含めたものであります。

以上が日本文学の翻訳、出版の現状であります。

日本文学研究の実情については家内から述べさせて頂きます。

（葉　渭渠）

日本文学の研究

御承知のように翻訳と研究は互いに促しあうものであります。日本文学の翻訳活動の発展につれて、編集者、研究者は日本文学にたいしてより多くの理解と研究を必要とするようになります。また一方では、読者も、より多くの、またより良い指導を求めるようになりますので、この事もまた、研究活動を大々的に推しすすめるようになるものと思います。

そしていま中国では、初歩的に日本文学研究の力が形づくられ、研究活動も新しい進展がみられるようになりました。いまでは、専業の研究者と余暇の研究者は合せて百人余りおります。専業の研究者は主として少数の大学、研究所と文学出版社、たとえば中国社会科学院外国文学研究所、北京大学東方語言学部、アジア・アフリカ研究所、東北師範大学日本研究所、吉林大学日本研究所、遼寧大学日本研究所と人民文学出版社、上海訳文出版社などにおります。余暇の研究者は、各大学の外語学部、中文学部または各行政部門に所属して、言語教育や仕事を主にして、研究活動を個人の業余の愛好にしています。この二つの隊列は、中年と青年を主とし、日本文学を研究する重要な力となっています。一九二〇年代、三〇年代頃に、すでに日本文学の翻訳活動に積極的にたずさわってきた大先輩である夏衍、林々、楼適夷諸氏もこうした活動に大きな関心

をよせていますし、なかには後輩にたいして緻密な指導を行なったり、忙しい公務の合間に、すすんで研究活動に参加したりしています。この外、北京大学、東北師範大学なども日本文学研究生を育成するようになりました。北京大学の日本文学研究生として、今年は三名卒業しましたが、かれらの卒業論文はそれぞれ森鷗外、夏目漱石、国木田独歩を研究テーマとし、論文によっては、一定の水準に達しています。研究生の養成は、日本文学の研究の隊列を充実し、新進を補足するうえで、たしかに重要な措置であります。しかし、全体的に言うと、日本文学の研究活動は、その翻訳・紹介の活動とくらべて、また西側の文学研究活動にくらべて、かなり立ちおくれているうえ、その力もかなり弱いといえます。こうなった原因はたくさんありますが、私は次の三つの点にしぼって言えるのではないかと思います――一、長期にわたって、外国文学研究活動のなかでは、西方を重んじ、東方を軽んじたため、日本文学はそれ相当の重視を得ることができず、基礎が弱いこと。二、解放後、外事と科学技術関係の事業の発展によって、学校側が人材育成のうえで語言教育に重きをおいたため、少数の学校だけに日本文学の課目が設けられ、日本文学研究者にたいする養成が少なく、研究の力が時を移さず強化されなかったこと。三、これはとりわけ重要な点ですが、前に述べたように長期にわたる「左より」の誤りと「四人組」の影響と破壊によるもので、ここではそれについて説明は省略させて頂きたいと思います。

一昨年、日本文学研究会が成立されました。その大会が行われる直前に、「全国日本文学討論会」がひらかれ、八十余名の研究者が参加しました。そして日本現代文学史編さん組討論会をも行いました。日本文学史上における重要な作品及び現在の文学的傾向にたいして、研究・探究をすすめ、また日本文学を如何に正しく評価するかについて真剣な討論をすすめました。これは日本文学研究活動のいま一つの新しい重要な一歩を踏み出したといえるものであります。

以上ご紹介したことからわかるように、研究の力、研究の基礎がかなり弱いために、研究活動もいとぐちが切られたとしか言えないと思います。解放前に、かつて謝六逸の『日本の文学』が出版されましたが、厳密に言えば、これは文学史と言えるものではなく、ただ、日本の文学概況を紹介したにすぎず、それでも、それは中国における唯一の、比較的まとまって日本文学の輪郭を紹介した専門書籍だと言えるものです。わが国の台湾省の情況については、私たちは現在のところ、あまりよく知りませんが、大陸では、いまだにこうした著作が出版されておりません。現在、外国文学研究所と人民文学出版社は、五つか、六つの部門の日本文学研究者を組織して、日本文学史の編さん、著述につとめています。現代部分はすでに初稿が完成し、いま加工しているところです。そのほかに、日本近代文学史、古代文学史を執筆計画に組み入れております。集団による編さん、著述以外に、研究者によっては断代文学史――たとえば戦後文学史、近代・現代文学史、あるいはある分野の略史――たとえば漢詩文略史・日本俳句史・日本戦後小説・日本戦後詩歌などを個人的に編さん・著述をすすめていく予定ですが、これを日程にのせたこと自体一つの進歩だといえるものであります。

この外、研究の対象も初歩的に局面がきり開かれるようになり、これまでの多くの空白を埋めることができるようになりました。『源氏物語』や『万葉集』にたいしての研究、日本の俳句の研究、また白樺派、新思潮派ないし新感覚派の研究、小林多喜二、芥川龍之介、森鷗外、川端康成等の研究も活発化してきました。多くの研究成果はいまや新聞、雑誌で、あるいは単行本、翻訳書のまえがきの形で示されるようになりました。この研究の基礎に立って、外国文学研究所、北京大学、東北師範大学、人民文学出版社の四つの部門の研究者は、数か月の努力を経て「中国大百科全書」外国文学の巻の日本文学部門――二百あまりの項目として十万字以上に達する内容を書き上げました。これは、今年中に出版する見込みになっております。

さらに喜ばしいことは、中国の詩人である趙朴初、林々、袁鷹氏などが、日本俳句十七文字の形式を参照して、十七文字の「漢俳」（漢式俳句）を創造したことです。

こうした新詩体の出現は、かれらが長期にわたって日本の俳句を研究した結果であり、また両国の詩人が長期にわたって文学の面で往来を続けた結晶でもあります。この例から、過去ばかりか、現在でも、中日の文

学関係は融けあい、互いに学び、互いに浸透し、補足と促進の役割をはたしてきたことが十分に説明できるのであります。こうした相手方の優れた文学の成果を研究し、参考にすることで、自己の民族の文化の宝庫を豊かにすることができます。私たちは、このような方式の研究と交流は積極的なことであり、自国の文学の豊富と発展にとって、両国の文学の共同の繁栄にとって、人類の文化の進歩にとっても、有益なことであると考えています。

（唐　月梅）

（本稿は、長谷川泉国際日本文学研究集会委員の御紹介により、中国人民文学出版社アジア・アフリカ組組長、中国日本文学研究会理事、葉渭渠氏ならびに、国際交流基金フェローとして来日中であった同夫人の中国社会科学院外国文学研究所研究員唐月梅氏に、昭和五六年一〇月一三日、当館でお話しいただいたものである）

（注1）

日本文学叢書（三十巻）

1、古事記・日本書紀
2、万葉集（選訳）
3、竹取物語・伊勢物語・落窪物語
4、源氏物語（上）
5、源氏物語（中）
6、源氏物語（下）
7、枕草子・徒然草
8、平家物語（上）
9、平家物語（下）
10、井原西鶴・近松門左衛門選集
11、日本謡曲・狂言選
12、日本古典詩歌集
13、浮世澡堂・浮世理髪館
14、二葉亭四迷小説選
15、幸田露伴小説選
16、樋口一葉・徳富蘆花小説選
17、国木田独歩・森鴎外小説選
18、川端康成小説選
19、島崎藤村小説選
20、夏目漱石小説選
21、徳田秋声・正宗白鳥小説選
22、芥川龍之介小説選
23、山本有三・谷崎潤一郎小説選
24、小林多喜二小説選
25、宮本百合子小説選
26、徳永直小説選
27、葉山嘉樹小説選
28、有島武郎・志賀直哉小説選
29、日本近代詩歌選
30、日本近代戯劇選

オーストラリアにおける日本文学研究の現状——

オーストラリア国立大学のT・ハーパー氏に聞く

ハーパー　私の承知している範囲でしか申し上げられませんが、オーストラリアでは日本語の教育が目立って盛んになり、その研究も、かなり進んでいます。しかし、日本文学の研究はまだこれからというところであろうと思います。

オーストラリア国立大学（The Australian National Univ.）の日本学科のディレクターAnthony Alfonso氏は、一五年位、日本の上智大学で日本語の研究をし、留学生などに日本語を教えていたスペイン出身のイエズス会の方で、日本語教育のりっぱな本を出しておられます。

文学については、私のほか、最近同大学を退職されたRoger Pulvers氏にかわって、ハーバード大学から来られたAndrew C. Gerstle氏が日本演劇を研究されています。（注1）

クィーンスランド大学（Univ. of Queensland）のJ.I. Ackroyd氏は新井白石の研究をされ、『折たく柴の記』を紹介されました。

シドニー大学（Univ. of Sydney）では、Sakuko Matsui（松井朝子）氏が夏目漱石など（注2）、Leith Morton氏が有島武郎など現代文学の研究をされています。

またタスマニア大学（Univ. of Tasmania）のP.F.Korniski氏が江戸時代の出版の研究をされています。

このほか日本歴史では、メルボルン大学（Univ. of Melbourne）にW.B. Eggington氏、L.R. Oates氏、オーストラリア国立大学人文科学研究所にAndrew Fraser氏、Edwin Sydney Crawcour氏がおられます。このように日本文学の研究者は数名を数えるに過ぎません。

デルブラット　アデレード大学（Univ. of Adelaide）、ジェームス・クック大学（James Cook Univ.）、モナシュ大学（Monash Univ.）、ウエスタンオーストラリア大学（Univ. of Western Australia）でも日本語を教えています。日本語の勉強のためのテキストには、やさしい文学作品も含まれていますが、文学の研究までには至っていません。（注3）

ハーパー　私は大学で、日本語を読めない学生のために英訳されたテキストで日本文学の概論を教え、日本語を学んでいる学生には文法も教えています。大学で日本語を学び、新聞などが読めるようになった後、さらに日本文学を勉強しようとする人は、デルプラットさんのように、主として米国か日本へ行って勉強しています。学術の面では、一般には、やはり英国やヨーロッパの影響が大きいのですが、日本学では多くの人が米国で学んでいます。したがって、研究論文も、米国の雑誌に発表され、図書も米国で出版されます。

日本の出版物に関する情報は、読書新聞や国会図書館の速報で得ています。またオーストラリアに日本の文献資料のコレクションがあるという話は別に聞いていません。

デルプラット　ニュージーランドでも、オークランド大学（Univ. of Auckland）、クライストチャーチのカンタベリ大学（Univ. of Canter-bury）で日本語を教えていますが、文学研究に及んでいるかどうかはわかりません。（注4）

（注1）第2回国際日本文学研究集会に「近松浄瑠璃と音楽の節付」を発表された。

（注2）第4回国際日本文学研究集会に、「三島由紀夫の近代能『熊野』について」の発表をされた。

（注3）福岡ユネスコ協会の『海外日本研究機関及び研究者要覧（一九八〇）』によれば、このほかグリフィス大学（Griffith Univ.）で日本語を教えている。（また、このほか、Junior College 等でも日本語教育をしているところがある）

（注4）同書によれば、マッセイ大学（Massey Univ.）でも日本語を教えている。

（本稿は、昭和五六年四月から国際交流基金フェローとして「源氏物語評論史」の研究のため来館されていたオーストラリア国立大学シニア・レクチュラー Thomas J. Harper 氏に、九月二二日にうかがったお話の要旨である。なお、Harper 氏のもとで学び、同じく国際交流基金フェローとして「江戸時代末期の戯作文学の研究」のため六月から来館されている、プリンストン大学博士課程の Adriana Delprat 氏も同席された。内容は多方面に及び、日本語教育についての興味あるお話もあったが、割愛させていただいた。）

第五回国際日本文学研究集会について

情報室

第五回国際日本文学研究集会が、昭和五六年一一月一三日、一四日の両日、当館大会議室において開催された。この集会は広く内外の研究者に参集を求め、研究発表と討議によって日本文学研究の進展をはかるために毎年当館が主催しているものである。今回の集会には海外から三〇名近い参加者を得て、総参加者数は八四名であった。

集会は一三日午後一時から始まり、当館館長の開会の挨拶のあと、井本農一（実践女子大学教授）座長の司会で研究発表が行なわれ、まずペンシルバニア大学大学院生の Margaret Childs 氏が「文学としての出家遁世談」を発表した。氏はここで、ペンシルバニア大学教授バーバラ・スミス氏の文学鑑賞法を紹介し、その方法によって「秋の夜の長物語」「三人法師」を解析、鑑賞してみせた。

次に作新学院女子短期大学教授萱沼紀子氏が「春雨物語―創造性の停滞」を発表、「雨月物語」と「春雨物語」とを比較して論じ、「雨月」に比べ見劣りのする「春雨」の小説的結構の破綻をきめこまかに検討し、「春雨物語」執筆時の秋成の創造力と情熱の停滞とを指摘した。

萱沼氏の発表後三〇分休憩。その後山本毅雄（図書館情報大学教授）座長のもと、Helen Isaacson、Donatus Stuart 両氏（グローニンゲン大学音声科学研究所員、および同所長）が発表を行なった。Isaacson 氏は「国際俳句データベース」と題して、現在オランダで行なわれているコンピューターによる俳句一万件のデータ作成と入力までの方法とそのプロセスを述べ、さらに今後の展望をも述べた。また Stuart 氏は、現在研究中のコンピューターによる俳句の自動仮訳システムを用いて、俳句の言葉が、受け取る人の心に自然を複製する機構を解明し、認識論へアプローチすることについて述べた。

しばらく休憩ののち、当館本田康雄教授より、当館の利用案内、及び当日の特別展示についての説明があり、午後五時からは当館ホールにおいてレセプションが行なわれた。

二日目、一四日は長谷川泉（学習院大学講師）、福田秀一（当館教授）両氏の合同司会で午前一〇時から研究発

表が行われた。まず、山梨学院大学助教授坂本秀次氏が「森鷗外・ドイツ留学最後の一年」を発表、氏はここで、鷗外がドイツ留学最後の一年、何故に憂鬱でなければならなかったのかの要因を、『独逸日記』『石黒日乗』その他書簡類を駆使してさぐり、また『石黒日乗』から『舞姫』の背景ともなる部分を採り出して考察した。続いて、スタンフォード大学大学院生Chia-Ning Chang氏が「海外における啄木研究・翻訳の動向―英語圏を中心として―」を発表、タイトルどおり、一九三〇年代から現代に至るまでの啄木研究の海外での動向を網羅的に説明した。休憩ののち、ソ連邦科学アカデミー世界文学研究所のLe Chun Kim氏が「『浮雲』の主人公文三は余計者であろうか」を発表した。氏はここで、従来日本人研究者によって度々なされてきたツルゲーネフ等の小説に出てくるいわゆる余計者と内海文三（浮雲の主人公）とを比較して類似的であるとする論は安易であることを指摘し、さらに『浮雲』の要点を、それは文三とイデオロギーとの軋轢などではなく、資本主義の体質自体が文三の如き人間を容赦しないというところにあるのだと説いた。最後の発表はミシガン大学教授Robert Brower氏の「藤原定家と新古今時代歌論の諸問題」である。俊成・定家の活躍を概説したのち、彼らの目指したものは、和歌の質の向上にあったと述べ、さらに歌論書については、当時の日本には大規模な文学的・哲学的な文学論をつくるという伝統がなかった故に、秀歌例が多くなったこと、また『毎月抄』のように理論的要素の濃いものでも、その論の表現が西洋人にとってはなはだわかりにくいものであることを、教授自身の翻訳の際の実例を挙げて説明した。

以上、一四日午前中で研究発表が終了したが、一三日に続きこれらの発表にもフロアーから幾多の興味深い質問が提出され、意義ある質疑応答がなされた。

昼食後、午後二時から、当時当館客員教授であったルール大学教授Bruno Lewin氏の講演が行なわれた。演題は「明治初期における歌論の独訳」で、主にAugust Pfizmaier、Johann Hoffmann両教授の業績を時代を追って話された。

なお、当研究集会の発表及び質疑応答、講演の概要については、本年三月、当館より「国際日本文学研究集会会議録（第五回）」が発行されており、各大学の国文学研究室（あるいは附属図書館）等に配布されているので、詳細を知りたい方はそれを見ていただきたい。

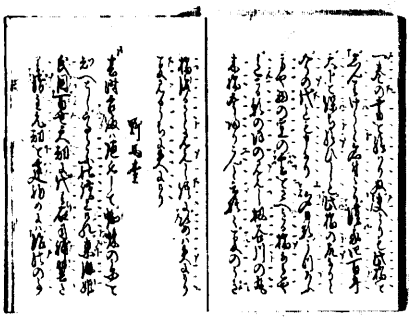
新収資料紹介⑲

久世舞

『久世舞』四冊、江戸後期の写本。二百曲の曲舞・語りを集成。鴻山文庫蔵「番外曲舞語り七十一番本」のみが持つ稀曲を含み、若干の新種便用謡等を収める。縦二二・七糎、横一六・二糎、布目地紺表紙、袋綴、中央に長型書題簽を貼る。各冊に目録題「久世舞」及び五十曲の目録を添え、目録内題下に、「平岡直行」の角印（陰刻）を押捺。本文は、直シ・振仮名等を朱書。冊次不詳ながら各冊の下小口にヒ・ラ・ヲ・カと記すに従い、便宜的に㈠～㈣を以て示す。㈠は鴻山文庫蔵福王盛有章句本「久世舞」に重なる曲が多く、一部は同「番外曲舞語り七十一番本」所収曲に重なる。㈡は貞享三年刊「当流外蘭曲」に拠り、一部は七十一番本所収曲をも合わせる。㈢は所依未詳。番外曲中より集成したらしいが、三之船・草袴・十体・法花経・湖之八景・茶経・四季問答・十種香・野馬台等の珍曲を含むので、この冊だけ曲目を別掲する。㈣は七十一番本所収曲に番外曲等を合わせる。

㈢の所収曲。花紅葉・三之船・一本菊・将軍塚・草袴・浜土産・七十二侯・西国廻・源氏目録・十体・大黒・黒谷詣・法花経・湖之八景・琴・茶経・明石・紫野・四季問答・啼不動・十種香・梅・布袋・紅葉・宇治橋姫・現在檜垣・錦織・九十賀・丁固・宮城野・甲斐塚・一言主・恋松原・鶴岡・鶴亀之中・百紅葉・鶯・花丸・鷺之前・御室・鯉魚・白狐・薄・梅乙女・若草・玉江橋・野馬台・小倉山・藤浪・蛭子

（伊藤正義）



情報検索システムのテスト公開について

田嶋　一夫

一、はじめに

コンピュータの導入以来、懸案となっていた情報検索システムが、遅ればせながらも、開発がすすみ、公開テストを行える段階に近づいてきました。これまでの経緯やシステムの概要について報告いたします。

国文学研究に活用する情報検索システムとして、何をなすべきかについては、文献1、2、3等を通じて、考え方を発表してきました。その要点は、A、テキストの所在を知るための原本検索システム　B、研究状況を知るための論文検索システム　C、テキスト本文の語彙を検索するシステム、の三種が、最初に開発すべきシステムであるということです。

二、開発の経緯

検索システムの開発については、コンピュータの導入当初（五三年一月）から、研究を行ってきました。しかし収集したマイクロ資料や逐次刊行物の目録を作成し、本の形で研究者に提供することや、資料管理システムの開発等、館内作業の機械化の方が、より緊急性が高いと判断し、こちらを先にすすめてきました。また当時は日本語処理システムも未整備の状態でした。本格的に日本語を処理しようとする場合にどのような問題があるかといった基礎的な問題も明確ではありませんでした。このために当館としては、メーカー（日立）の協力を得て、実験用として日本語データ用検索システムを開発し、これに国文学の論文データをのせて、さまざまなテストをくりかえしてきました（詳細は文献4、5）。昨年の春頃より来館者に、ときおりお見せし、御意見をうかがっていたのがこのシステムでした。しかし、これはあくまでも実験用に開発したものですから、多少の問題があり、大量のデータをのせて運用していくことは機能の上で不可能でした。昨年末に、メーカーではこのような経験をとりいれ、ＯＲＩＯＮという汎用検索システムに、日本語データを扱える機能を付加した上で提案してきました。当館ではこのシステムに国文学データベース用に必要な機能をさらに加え、国文学の検索システムとしての整備をはかりました。これによりようやくテスト公開にはいれるようになったのです。

三、テスト公開の概要

このテスト公開にふみきった主たる目的は、利用者の方々に、検索システムに関する基礎的な御理解をいただくことと、当館として実際の運用にあたってどのような問題があるか、今後どう整備していくべきかをあきらかにすることにあります。

利用形態としては、館内設置端末によるオンライン検索になります。これは多数の端末から電話回線を介して、或はコンピュータネットワークシステムを介して、アクセスすることは、現在の当館コンピュータシステムでは不可能なためです。

対象となるデータベースは、国文学の論文データです。今はデータ量も多くありませんが、おいおい充実させていきたいと思います。

利用者の範囲については、これから決めなければなりませんが、当館資料利用規定に定められた、資料を閲覧できる者の範囲となると思われます。つまり所属をとわず研究者や学生ならどなたにでも御利用いただけるようにしたいと考えています。

テスト公開の時期は、現時点では明確に設定できませんが、五七年度の前半ということになるでしょう。

四、インデックス

現在、システムの具体的な中味にどのような機能を用意するかについて仕様を固め、開発に入っています。このうちインデックスと検索の種類は次のようになります。

インデックスにするものは、キーワード、タイトル、著者（論文執筆者）名、雑誌名、発行年です。

検索の種類は、

(1)かな漢字対応完全一致検索
(2)　〃　前方一致検索
(3)　〃　後方一致検索
(4)漢字直接完全一致検索
(5)　〃　前方一致検索
(6)　〃　後方一致検索

の六種類です。

つまり、かなをいれても漢字に変換して、漢字データを検索できるようにしてあります。また漢字を直接いれても検索できます。具体例で説明しますと、(1)の機能により、キーワードが〝ゲンジモノガタリ〟である文献を探せ、と指示しますと、〝源氏物語〟とある文献を探すということです。またキーワードの後方の二文字が〝日記〟である文献を探せ、と指示しますと、土佐日記、更級日

記、紫式部日記といった文献を探すということです。また著者○○とキーワード××（○○が××について書いた論文を探せ）というように、インデックスを組み合せて検索することも可能です。

五、今後の課題

今回テスト公開にふみきったシステムは、論文検索だけで規模も小さなものです。今後はデータベースを充実させていきたいと思います。またわざわざ資料館まできていただかなくとも、利用者が自分の研究室に設置した端末からも利用していただけるようにしたいと思います。このためには、現在よりも大きなコンピュータシステムへの切り換えと、データベースの作成体制を整備しなければなりません。

やっと歩みだそうとしているこの論文検索システムは、ちょうど人間にたとえれば、赤ん坊のようなものです。この赤ん坊が順調に成長し、一人前になれるかどうかは、提供する側だけの問題ではなく、研究者の方々の積極的な御利用と御援助によるところが大きいと思います。この意味で真の共同研究のツールとして成長させていただきたいと思います。

最後に、論文検索以外のシステムのうち、語彙検索に関するシステムは、ほぼソフトウェアが完成しました。あとはデータ作成体制がととのえば運用できる見とおしです。語彙検索システムについての詳細は、文献6で報告しております。御覧いただけますれば幸いです。

〔文献〕

1、「国文学研究と電子計算機」（当館館報3号、昭49・9）

2、「国文学研究と情報検索」（14回情報科学技術研究集会発表論文集、昭53・3）

3、「国文学研究におけるコンピュータの活用」（文学・語学八〇・八一合併号、昭53・2）

4、石塚、星野、田嶋、「日本語IRシステムによる国文学論文検索」（情報処理学会22回大会論文集、昭55・10）

5、石塚、「国文学論文情報検索・日本語データベース用ユーザ志向型検索システムの開発とその応用」（東大情図センタ紀要一、昭57・3予）

6、「国文学語彙検索システム及び索引誌の作成に関する研究」（科研費試験研究(2)、報告書、研究代表者　市古貞次）

新収資料紹介⑳

大蔵九郎雛子伝書

室町時代後期の大鼓の伝書。一軸。縦一七・六×全長四五七・六糎。表紙は金茶色緞子に牡丹唐草模様。見返しは銀箔に布目押し模様。外題・内題ともになし。奥書（写真参照）より、明応元年（一四九二）に小次郎権守から大蔵九郎へ伝えられた大鼓の秘伝を、永禄十年（一五六七）に九郎が暮松因幡守越智通春に相伝し、さらにそれを天正一三年（一五八五）に転写したものと考えられる。六十一ケ条とあるが、首部を欠くため四十九ケ条と半分程しか現存しない。

小次郎権守とは、音阿弥元重の第七子信光のことであり、大鼓方として活躍する一方、四世観世大夫であった長兄政盛の死後、その子之重が幼いのを輔佐してシテ方をも勤め、長い間観世座を代表する位置にあった人物である。また能作者としても著名で、その作約三〇曲が知られ、内十二曲が今日も演じられている。大蔵九郎能氏は、『四座役者目録』に「観世小次郎権守ノ弟子也」とあるように、信光直系の大鼓の弟子であり、これもまた名人であった。暮松因幡守越智通春は、河内守護代遊佐河内守信盛の配下であり、信盛が金春座の有力な後援者であったためか、通春も能に打ち込み、退穏後半玄人的存在となったのか、しきりに伝書を相伝している。

同系統の観世小次郎から大蔵九郎への大鼓伝書には、陽明文庫・由良家・鴻山文庫・般若窟文庫（二種）・大阪府立図書館石崎文庫・彰考館・臼杵市立図書館（未見）など数種の伝本が知られているが、本書も首部を欠くものの、室町後期の大鼓の相伝の実態を窺える好資料と言えよう。

（小林健二）

文庫紹介① 麗沢大学図書館

「田中文庫」は麗沢大学がその前身麗沢短期大学であった昭和三三年、大学と同じ構内にあるモラロジー研究所参与であった田中治郎左衛門氏から寄贈された田中家伝来の蔵書である。

田中家は江戸初期に伊勢に身を起し、やがて江戸に出て木綿問屋として栄えた大伝馬町の田端屋であり、安藤広重の錦絵にもなっている。

伝存する千点に及ぶ蔵書の保存状態を見ると、いかに大切に蔵せられていたかが窺えるが、田中家の代々には文芸愛好者が多く、実作者として和歌或は俳諧を嗜む気風があり、こうした気風と田端屋の財力とによって蒐集され、保存されたものと思われる。

蔵書は江戸期の版本を中心に、ジャンルは全般にわたるが(別表参照)、その半数強が文学関係のものである。例えば、俳書一七〇点は数は多くないが、江戸期全般にわたり、俳諧史の流れを通観することができる。また百余点の合巻も刊行時を髣髴させる保存状態である。総じて、商家のコレクションとしての一つの形を呈しており、興味深い。

本蔵書は、寄贈される以前にも一応の分類整理がなされていたが、麗沢大学図書館では、その原形を損わぬように留意しながらも、NDC分類を与えて利用しやすいように再整理し、別置保管している。

国文学研究資料館では、麗沢大学図書館の御協力を得て、昭和五五年度から調査を始め、五七年度からマイクロフィルムによる収集を行っており、現時点では文学関係の調査を終え、その内小説関係を残して収集も終っている。五八年度も継続して調査収集を行うが、遠からず利用に供し得るであろう。

麗沢大学図書館
場所　〒277　千葉県柏市光ケ丘二-一-一
電話　〇四七一-七二-三六八一

（文献資料部　島原　泰雄）

1. 和装本（大和綴・折本）

NDC分類		田中式分類	国書（タイトル）	国書（冊）	漢籍（タイトル）	漢籍（冊）
000	百科事典等	博・雑	7	92		
100	思想・仏教等	儒・仏	107	342		
200	歴史・地誌等	銭・甲史・名	123	662	8	177
300	政治・民俗等	儒・雑	10	35	1	6
400	天文・医学等	博・雑	5	20		
500	建築・家事等	乙史・雑	4	6	1	1
600	農業・園芸等	博	5	25		
700	書画・茶道等	書・茶・奕	140	354	45	86
800	語学	辞・字	23	103	10	138
900	文学	歌・和・俳・詩・乙史・絵	456	2147	20	161
		計	886	3786	85	669

2. 畳物・一枚物

NDC分類		田中式分類	畳物（タイトル）	畳物（鋪）	枚物（タイトル）	枚物（枚）
100	仏教	仏	2	2		
200	古銭学	銭	25	50	7	7
300	軍事	名	1	1		
700	書画・茶道	書・茶	4	4	9	39
900	文学	俳			1	1
		計	32	57	17	47

（上記の表は麗沢大学図書館「図書館報」35号「田中文庫の紹介」より執筆者上田主任の許可を得て転載した。）

文献資料部事業報告

福田　秀一

昭和五十六年度は、先年来毎年のことであるが、物価・運賃等の値上りにも拘らず、撮影諸経費や旅費など予算の中には前年度据置や削減のものもあるという、きびしい状況でスタートしたが、当部の主要事業である国文学文献資料の調査・収集に関しては、各所蔵者や委員・調査員等関係各位の絶大なる御理解・御好意や御協力によって、間もなく年度も終ろうとする現在、ほぼ計画通りの達成を見た。

以下恒例に従って、前号に引続き昭和五十六年七月以降の当部の主な事業につき報告する。

中国・四国地区文献資料調査員会議

七月三十一日、今治市の河野信一記念文化館会議室で開催、当部から伊井が出席した。

先ず当部から今年度の海外を含めた全般的な調査収集の進行概況を報告した後、高知県立図書館の立会等、地区内の問題につき協議した。

ついで、当時実行中の河野信一記念文化館本の調査作業の体験と反省を踏まえて、調査の具体的な方法につき、有益な意見交換を行なった。

また、版本の調査方針や調査カードの様式・記入法等についての質問や要望もあった。

続いて、地区内の資料所在状況やそれらへの今後のアプローチについて、情報や意見の交換を行なった。

北海道・東北地区調査員会議

十月二十四日、仙台市の翠風荘で開催、当部から新藤・小林が出席した。

先ず当部から、同地区の今年度の調査収集計画が予定通り進行していることを報告し、ついで各調査員から分担計画の実施結果とその問題点が出された。そして、次年度以降の計画についても、種々具体的な意見の交換を行なった。

また、収集成果としての紙焼写真等を地方にも置く件など、当館に対する一、二の要望が出された。

近畿地区調査員会議

十月三十一日、京都会館で開催、当部から棚町・高田が出席した。

先ず当部から、今年度の調査収集計画が予定通り進行している旨の説明があり、ついで各調査員から分担計画の実施状況・結果につき具体的な報告があった。

ついで、今後の調査収集計画に関して、対象や方法等につき、意見や情報の交換を行ない、具体的な成果を得た。

更に、収集成果としての紙焼写真が地方でも簡便に利用できるようにしてほしいこと等の要望が、当地区でも出された。

なお、各地区会議で出された意見・要望等は関係部局に伝達すると共に、次年度以降の調査収集の計画・方針等もっぱら当部に関するものは、検討の上、可能なものはすでに次年度計画に計上してある。

第四室

昭和五十六年度は、伊藤正義（大阪市立大学）橋本朝生（山梨大学）の両氏を迎え、主として中世仏教・芸能関係の分野で当部に助力を乞うたが、その著しい成果としては、次の点がある。

基本方針は前年度と同様で、第一に主として右の分野に関して当部の従来の調査収集の跡を検討した上、今後の計画の立案・推進に役立つ助言を願った。第二にはその実践例として、当部教官ならびに調査員諸氏をも伴って大津市の西教寺や彦根市立図書館（琴堂文庫）の調査に従事し、その内容につき研究することをお願いした。それらはいずれも有益な成果を得たが、その一端は『調査研究報告』第三号（近刊）に発表の予定である。

昭和五十六年度文献資料調査・収集の概況

一、調査

本年度当部は、全国各地の調査員・同特別調査員ならびに所蔵機関その他関係者各位の協力を得て、本年一月末現在で左の五十四箇所（予備調査を含む）で延べ約一八〇件の調査を行い、計八、九〇〇点の文献資料を調査した。所蔵者ごとの調査点数は紙幅の都合で今回も『調査研究報告』第三号に譲る。

北海道東北地区（順不同、以下同じ）

旭川市立図書館・盛岡中央公民館・県立市立図書館・鷹栖神社・弘前秋田図書館・会津若松市立会津図書館・鶴岡市立図書館・稲荷文庫

関東地区

彰考館・東洋文庫・東京芸大附属図書館・宮内庁書陵部・東大国文学研究室・都立中央図書館（加賀文庫）・永青文庫・鹿沢大学図書館・県立佐倉高校（鹿山文庫）・船橋市立図書館・大倉精神文化研究所附属図書館・某文庫・久松国男

中部地区

新潟大学附属図書館・富山県立図書館（志田文庫）・金沢市立図書館（稼堂文庫）・武生市立図書館・上田市立図書館・岐阜県立図書館・徳川美術館・蓬左文庫（尾崎コレクション）・神宮文庫・愛知教育大学附属図書館・射和文庫・牧野文庫・某氏

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・京都女子大学附属図書館・京大文学部（頴原文庫）・陽明文庫・大阪府立中之島図書館・大阪女子大学附属図書館・土橋留以子・大和文華館・西教寺・某氏

中国・四国地区

宇部市立図書館・山口県文書館・毛利報公会博物館・多和文庫・河野信一記念文化館・高知県立図書館

九州地区

九大附属図書館（支子文庫）・熊本大学附属図書館（寄託北岡文庫）・佐賀大学附属図書館（小城鍋島文庫）・臼杵市立臼杵図書館

二、収集

本年度は、現在すでに左の二十六箇所で計五、六四二点の文献資料を収集（マイクロフィルム撮影）した。これに関しても、所蔵者はじめ関係各位にあつく御礼申し上げる。

北海道・東北地区

市立函館図書館・青森県立図書館・塩竈神社

関東地区

彰考館・鹿沢大学図書館・宮内庁書陵部・東京芸大附属図書館・都立中央図書館（加賀文庫）・東洋文庫・久松国男・初雁文庫

中部地区

富山県立図書館（志田文庫）・静岡県立中央図書館・市立刈谷図書館・西尾市立図書館・蓬左文庫（尾崎コレクション）・岐阜県立図書館・神宮文庫・某氏

近畿地区

陽明文庫・中村幸彦・大阪大学附属図書館（忍頂寺文庫）・某氏

中国・四国地区

三原市立図書館・河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

国際日本文学研究集会会議録
（第五回）
国文学研究資料館報告第9号
「目録出力用ソフトウェア」

研究情報部事業報告

小山　弘志

当部三室の昭和五十六年度後半の事業は左記のごとくである。

情報室

昭和五十六年十月十三日、長谷川泉委員の御紹介により中国の葉渭渠・唐月梅両氏との懇談会を行った。その時のお話をまとめたのが本号掲載の「中国における日本文学の翻訳と研究」である。これより先、九月二十二日にも、国際交流基金のフェローとして来館されているオーストラリアのハーパー氏に、オーストラリアの日本研究についてお話しいただいた。折しも来日中のニュージーランドのデルブラット氏も同席された。その要旨も本号に掲げた。また、本年一月二十七日に、ミシガン大学教授ブラワー氏の「最近の米国における日本文学研究の動向について」と題するお話をうかがった（次号に要旨を掲載する）。以上のように、海外における日本文学研究についての情報を収集すべく努めている。

研究者ファイルの補充のための研究者カードには、従来の二九〇〇名の方々のほか、新たに一四四六名の方々から御回答いただき、充実させることができた。御協力いただいた各位に厚くお礼申し上げる。

昭和五十六年十一月十三・十四日、別稿のように第五回国際日本文学研究集会を開催し、本年三月、その会議録を発行した。

編集室

『国文学年鑑』（昭和五十五年分）の編集を行った。今回より「収載雑誌紀要一覧」において、これら雑誌類の当館所蔵の有無（昭和五十七年一月末日現在）を示すことにした。これは整理閲覧部の協力によるものであるが、当館利用者の便をいささかながらも増すことになると思っての処置である。三月二十五日、至文堂刊。

「国文学研究資料館紀要」第八号は、論文五編、資料三点を収め、三月末日に刊行する。至文堂発売。

「昭和三十七年以前研究文献目録」の編集は、引きつづき当館所蔵の雑誌類の論文をカードに採る作業を行っており、三月末日までに約二万点をコンピュータに入力する。

情報処理室

今年度の研究開発として、和古書

目録作成システム、語彙索引誌作成システムを発注した。前者はすでにソフトウェアの開発を終り、運用テストも完了した。年度内に和古書目録第一版の版下出力を行う予定である。後者も年度内にソフトウェアの開発を終る予定である。論文検索システムは、来年度からの試験公開に備え、開発仕様の検討を終り、プログラムの作成からファイルの作成にはいる(詳細は本号別稿で説明)。

情報処理システムの運用の面では、マイクロ資料目録の一九八一年版用版下、逐刊目録一九八二年版用版下の出力を順調に終了した。資料管理システムも順調に運用できた。文字セット管理システムの運用は、和古書、著者オーソリティ等、入力データの種類の増加に伴い、外字の出現も増加したため、新たに一六〇字あまりを登録した。

科学研究費(試験研究(2)研究代表者市古館長)により昨年度から行っている語彙検索システムの研究開発は、順調に進んでシステムが完成した。現在、報告書のとりまとめを行っている。

『国文学研究資料館報告』九号は、「目録出力用ソフトウェア」として、昨年度開発した汎用編集ソフトウェアについて報告する。

また機器構成の面では、十月に漢字端末及び端末プリンタ各二台を増設した。三月末には、漢字ラインプリンタ(二七〇〇行/分)の増設を実施する。

なお、宮澤彰助教授は、五十六年度の文部省在外研究員として、三月末より英国及び米国に出張する。

整理閲覧部事業報告

本田　康雄

資料の収集、受入、整理、保存及びサービス、並びに講演会・展示会の開催等の定常的業務は順調に進展した。以下に、この期間における重点事項をのべる。

開館以来五年目をむかえたが、閲覧利用者は、ひきつづき顕著に増加しつつある。相互協力によるサービス(大学図書館等を経由する郵便による複写、貸出等のサービス)、参考質問に対する回答業務等も増加傾向にある。今後ともサービスの拡充に努めていきたい。

古典籍総合目録作成事業の一環として、全国の文庫、図書館等を対象として、古典籍所蔵状況調査を実施した。御多忙中にもかかわらず、複雑な調査に対して綿密な回答を多く寄せていただくことができ、又所蔵目録、その他の御寄贈等も多く賜わった。お礼を申し上げると共に今後とも御協力をお願いする次第である。

所蔵原本の目録は従来カード目録であったが、蔵書の増加に伴って、全国の研究者による利用を促進するため、冊子体目録を刊行する必要が生じてきた。そこで情報処理室におけるシステム開発と連携して、目録データの作成を行った。特に、著者名に関するデータをもあわせて収集し、これを著者名典拠ファイルとして維持、利用することにした。

公開講演会は、これまで当館を会場として実施してきたが、これを東京以外に拡大する試みとして京都で実施した。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

本年一月末迄における資料受入数はマイクロ資料(オリジナルフィルムの数)一、〇〇六リール、図書二、六六五冊、逐次刊行物六、二二六巻号冊であった。また昭和三七年以前文献目録作成事業のための逐次刊行物バックナンバー複写収集は四九四巻号冊であった。

家郷隆文氏より『中院集』を、武者小路不二子氏より『和歌三部抄傳授之切紙』ほか五点を、御寄贈いただいた。

(2)古典籍総合目録作成

古典籍所蔵状況調査は、全国の図書館、文庫、資料館、博物館等四、〇四六カ所を対象として、アンケート方式により実施した。半数以上の二、〇四一カ所から回答を得、現在、調査結果のとりまとめを行っている。調査結果は、今後の事業の実施に有効に生かしていくつもりである。

古典籍総合目録委員会、古典籍総合目録専門委員会で、実施計画の策定、出力仕様その他の技術的な仕様の検討等を行い、又、書誌データ約二〇、〇〇〇件も作成した。

(3)整理業務

『マイクロ資料目録一九八一年』は、七月以降、約五、〇〇〇件のデータ作成・入力が行われ、年度内に刊行される。この収録書目数は、計八、三二二点である。次年度目録用のマイクロ資料の整理も順調に進んでい

る。

また、当館初の所蔵原本（写本、版本）を収載した『国文学研究資料館蔵和古書目録』は、約四、五〇〇件のデータ入力が行われ、年度内刊行をめざして、急ピッチで編集作業が進められている。

(4)閲覧業務

八月の入室者数がついに千名を突破した。月間の数としては、開館以来の記録であり、また、十二月一日の時点で前年の入室者総数を上回った。八月をピークに夏から秋にかけての期間、閲覧室は連日四十人前後の利用者で混雑し、座席やロッカーが足りなくなる日も出たほどである。資料の利用もこれに伴って大幅に伸び、前年同期（十二月現在）と比較すると、閲覧件数が三六％増、複写件数は四三％増を示している。

一方、相互協力による複写申込の件数も前年同期比でちょうど二倍に達している。昨年度作成、配布した『共同利用のてびき―相互協力サービス案内』の効果をここにみることができるとともに、国文学資料の全国センターとしての当館の活動がいよいよ軌道に乗り始めたものと受け止めている。

(5)マイクロ室業務

作業用ネガフィルムの作製を二〇九リール行い、前期作製分とで五十五年度収集分の七五％を終了した。閲覧用ポジフィルムは七二二リール作製し五十三年度収集分の加工を終了した。紙焼写真本については、刈谷市立図書館他四文庫の資料五四九リールの紙焼写真を作成し、二五三〇冊の製本を行なった。撮影業務では、収集撮影一点、文献複写サービス七点を撮影した。なお文献複写サービスとして他にポジフィルムを五十一点作製している。

(二)参考室

夏休みを含むこの期は、卒論等による利用者で参考開架室の利用も参考質問も増加した。この間、参考図書の整備、質問の調査・回答、参考トゥールの作成等に携わった。

国文学の普及業務の講演会、展示は左記のとおり行った。その内、当館創立十年を記念して、京都で開催した講演会は、東京以外での講演会として初めての試みであった。

○第四回夏期公開講演会　「近世の小説」（九月三～五日、於当館。講演集刊行予定）

三日　「仮名草子の人物造型」国文学研究資料館助教授　渡辺守邦氏、「西鶴が描いた人間たち」共立女子大学教授　浅野晃氏。

四日　「近世中期小説の世界」九州大学助教授　中野三敏氏、「浮世草子の西鶴離れ」埼玉大学教授　長谷川強氏。

五日「近世小説と挿絵―一代男の場合」大阪大学教授　信多純一氏、「江戸の小説」早稲田大学教授　神保五彌氏。

○第十五回公開講演会―創立十年記念（十月三十一日、於京都会館）「北野天神の歌」京都大学教授　佐竹昭広氏、「源氏物語の世界」東京大学教授　秋山虔氏。

○特別展示

館蔵貴重書展（九月三～九日）、国学者自筆本と新収資料を中心として（十一月十二～十八日。同展展示目録を『国文学研究資料館特別展示目録六』として作成・刊行）。

○常設展示

日本文学の空間（七月十五日～八月二十九日、九月十六日～十一月七日）、平安時代の文学（十一月二十七日～一月二十八日）。

共同研究

昭和五十六年度の共同研究は、前号所載のように前年度から引続きの共同研究員九名と館の教官六名（福田秀一・棚町知弥・新藤協三・渡辺守邦・島原泰雄・岡雅彦、順不同）とが、前年度以来の久松班と俳書班（いずれも仮称）とに分れて、それぞれ次のような活動を行った。

（久松班）前年度を受けて、久松国男氏寄託本に例をとって中古・中世の歌学・歌論書の解題の方式の検討を進めた。また、久松家の御好意を得て、未寄託本一七二点を整理し、仮目録を作成した。

（俳書班）四年目に入った俳書班は、最終年度として、先年来分担執筆中の『酒田市立光丘図書館俳書解題』を本年度（昭和五十六年度）に完成させるべく、編集のまとめと推敲を行った。そのため、分担者全員が各一～二回同図書館を訪れて現物による確認を行い、また解題の事項を適宜分担して、最小限必要な形式上の統一をもはかった。更に、同図書館蔵俳書コレクションに伺われる庄内地方俳壇の趨勢をも、右『解題』に織込むよう努力した。

これらの成果は、『国文学研究資料館共同研究報告2』として目下印刷中で、五月に明治書院より刊行の予定。『同報告1』の初雁文庫の場合と書物としてはほぼ同じ分量になるが、

巻頭に図版を加えたほか、解題本文を各作品ごとに書名・内外題・類別・寸法・刊記・内容・諸本等の十二項に分かって箇条書にしたことなど、俳書解題ないし版本解題としての特色を盛ってある。

評議員会議の開催

本年度第二回、第三回及び第四回評議員会議が、それぞれ十一月二十六日(木)、十二月十五日(火)及び十六日(水)当館中会議室において開催され、市古館長の退職に伴う次期館長候補者の選出について評議が行われた。

また、第五回評議員会議が、三月五日(金)当館中会議室において開催され、昭和五十七年度予算について、昭和五十六年度事業（中間）報告及び昭和五十七年度事業概要等について評議が行われた。

委員会日誌

7月31日　国文学文献資料調査員会議（中国・四国地区）
9月7日　国際日本文学研究集会委員会（第2回）
10月22日　古典籍総合目録委員会
10月24日　国文学文献資料調査員会議（北海道・東北地区）
10月31日　国文学文献資料調査員会議（近畿地区）
11月13日　国際日本文学研究集会委員会（第3回）
11月28日　文献目録委員会（第2回）
2月23日　共同研究委員会（第2回）
3月2日　国文学文献資料収集計画委員会（第2回）
3月9日　情報検索委員会（第2回）

外国人研究員

氏名　ブルーノ・ヘルムート・レヴィン
現職　ルール大学ボッフム教授
期間　昭和56年10月16日～昭和57年2月28日
研究内容　日本文学の発生と展開

公立大学研修員

氏名　徳満　澄雄
現職　高知女子大学教授
期間　昭和56年5月1日～昭和56年10月31日
研究題目　源氏物語受容史の研究

大学院受託学生

氏名　武井　和人
所属　東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻
期間　昭和56年4月1日～昭和57年3月31日
研究題目　中世文学の研究

海外出張等

外国出張
氏名　小山　弘志
渡航先国　フィンランド共和国
スウェーデン王国
フランス共和国
期間　昭和56年6月12日～昭和56年7月1日
渡航目的　国際作家会議出席及びスウェーデン王立図書館・フランス国立図書館における日本文学に関する文献の調査

氏名　伊井　春樹
渡航先国　オーストラリア
期間　昭和57年3月1日～昭和57年4月30日
渡航目的　オーストラリア国立大学での日本文学教育

海外研修
氏名　内藤　衛亮
渡航先国　連合王国
期間　昭和56年9月3日～昭和56年9月29日
渡航目的　英国図書館「公共図書館におけるオンラインサービス」セミナー、英国専門図書館協議会第54回年次総会出席

文部省在外研究員による渡航
氏名　宮澤　彰
渡航先国　連合王国
カナダ
アメリカ合衆国
期間　昭和57年3月29日～昭和57年9月28日
渡航目的　学術情報処理システム（図書館情報のデータベースシステム及び漢字情報の機械化処理について）の調査研究

国文学研究資料館紀要第八号

古今歌風の成立　平沢龍介
異本三十六人歌仙伝　新藤協三
うたたねの草紙論　阿部好臣
名取老女熊野勧請説話考　小林健二
「高館」の三人舞から　村上　学
江戸時代一休関係著作年表　岡　雅彦
二〇世紀前半における文学基盤の変化の指標について　山中光一
日本文学の独訳について　B・レーヴィン
（一部市販の予定）

利用者へのお知らせ

『和古書目録』（冊子体）刊行

当館では、資料利用のためのトゥールとして『マイクロ資料目録』、『逐次刊行物目録』を刊行してきました。それらに加えてこのたび、所蔵原本（写本・版本）を収載した『国文学研究資料館蔵和古書目録』が刊行されました。

これによって、当館所蔵図書のうち、写本・版本については、この冊子体の目録によって検索していただくことになります。なお、活字本・影印本については、今までどおりカード目録で資料を探していただきます。以下、当目録の概要を紹介します。

〈収録範囲・書目数〉

当館創設から一九八一年十二月までに収集・整理された写本・版本、約四、五〇〇点が収録されています。その内容は、貴重書をはじめ、特別コレクションの国学者自筆稿本・初雁文庫・諸大名著作コレクション、寄託資料の久松潜一氏旧蔵書・金子元臣氏旧蔵書、その他となっています。

〈目録の構成・排列〉

『マイクロ資料目録』と同様で、書名（統一書名）による基本目録・叢書参照補遺・著者名索引・書名索引（統一書名のほか記述書名からも引ける）の四つからなっています。いずれも五十音順に排列されています。

〈基本目録の記載事項〉

基本目録は、統一書名及び著者表示をもって標目とし、そのもとにそれぞれの図書の書誌事項を記入しました。

記載事項は、記述書名（記載題）、刊写の別、刊年・出版地・書肆名（写本の場合は写年・書写者）、対照事項、一般注記、叢書注記・合綴注記、請求記号となっています。

一般注記には、残欠・装丁・印記などが表示され、請求記号には、図書請求記号のほか、マイクロ化された所蔵原本については、フィルム請求記号・紙焼写真本請求記号も表示されています。

一九八一年版目録案内

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』

一九八一年版マイクロ資料目録が刊行されました。この版には、八九二二点、二九所蔵者（文庫）分が収録されています。この中には、昨年版初収録の英国図書館蔵の在外資料に加え、チェスタビーティ図書館蔵の御伽草子（奈良絵本）類も含まれています。収録されている所蔵者（文庫）は次の通りです。

文庫No.	所蔵者（文庫）
30	刈谷市立図書館（村上文庫）
33	東洋文庫
34	神宮文庫
55	陽明文庫
63	徳島県立図書館（森文庫）
68	豊田工業高等専門学校図書館
72	高山市郷土館
73	今治市河野信一記念文化館
74	中央大学図書館
75	青山学院大学図書館
76	白百合女子大学図書館
77	群馬大学附属図書館
78	舞鶴市立西図書館
79	国学院高等学校（弦之舎文庫）
80	愛知教育大学附属図書館
87	太田市立中島記念図書館
92	上田市立図書館（花月文庫）
93	上田市立図書館（花春文庫）
94	上田市立図書館（藤蘆文庫）
213	The British Library
217	The Chester Beatty Library and Gallery of Oriental Art
237	国学院高等学校（藤田小林文庫）
オ1	大久保正
ク1	黒河リツ
ス1	杉原広義
タ3	大願寺
ト2	富田茂之
ヤ2	山本修之介
ヤ4	安井章吾

(2)『国文学研究資料館逐次刊行物目録』

昨年版より一九七誌増えて、収録総タイトル数は二四五〇誌になりました。昭和三十七年以前を中心とした学会誌、紀要のバックナンバー調査収集作業がほぼ終了した結果、従来の欠号分が大幅に補充されています。

その他

当館では、福井久蔵氏旧蔵の近世大名の著述を集成した資料を所蔵していますが、そのコレクションとしての価値を重視し、新たに特別コレクションに指定しました。「諸大名著作コレクション」（一三七点）です。概要については、『館報』七号の「新収資料紹介④」を御参照下さい。

また、次の五点が貴重書に指定されました。『太平記音義』（古活字版）、『年中行事歌合』（「五十番歌合」写）、『払惑袖中策』（古活字版）、『続高僧伝』（写）、『落窪物語』（刊）。

昭和五十七年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。掲出は五十音順。①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会①〒一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内

国語学会①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②五月二二～二三日③早稲田大学

古事記学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内②六月一九～二一日③群馬県立女子大学

古代文学会①〒一五四世田谷区豪徳寺一―五二―二多田一臣方

上代文学会①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部国文学研究室内

説話文学会①〒一一二文京区白山五―二八―二〇東洋大学文学部国文学研究室内

全国大学国語国文学会①〒二一四川崎市多摩区生田四七六四専修大学文学部国文学科研究室内②六月五～六日③専修大学神田校舎

中古文学会①〒六六三西宮市池開町六―四六武庫川女子大学国文学研究室内②五月一～二日③日本大学文理学部

中世文学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第三研究室内②五月二二～二三日③国学院大学

日本演劇学会①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②五月一五日③学習院大学

日本歌謡学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②五月八～九日③高千穂商科大学

日本近世文学会①〒一〇三千代田区三番町一二大妻女子大学国文学研究室内②六月二六～二七日（但し事務局予定）③大妻女子大学

日本近代文学会①〒一七六練馬区豊玉上一―二六武蔵大学人文学部内②五月二二～二三日③武蔵大学

日本口承文芸学会①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②六月五～六日③沖縄国際大学

日本文学協会①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇

日本文学風土学会①〒一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学国文学研究室内

日本文芸研究会①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内②六月五～六日③東北大学文学部

俳文学会①〒一九二―〇三八王子市東中野七四二中央大学文学部三八三三号研究室内

表現学会①〒四八〇―〇二愛知県愛知郡長久手町大字長湫愛知淑徳大学文学部国文学科研究室内②五月一五～一六日③岡山大学

仏教文学会①〒一一二文京区白山五―二八―二〇東洋大学短期大学日本文学研究室内。（西部事務局）〒六〇四京都市中京区西ノ京壺ノ内町八―一花園大学国文学研究室内

万葉学会①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一―二中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会①〒一〇一千代田区神田神保町三―二七共立女子大学四〇九国文研究室内

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料（切手）を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第十八号
昭和五十七年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話（七八五）七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興